保存活動

美術作品を保存し、後世に伝えていくことは、美術館の持つ重要な機能の一つである。美術館は単に作品を公開するだけではなく、人類の文化遺産である文化財を、適切な形で管理していかなくてはならない。

当館ではIPM（Integrated Pest Management、総合的有害生物管理）と呼ばれる考え方に基づく環境保全の試みを、推進していく方針である。大規模な燻蒸に頼る従来の方法を改め、環境を改善することで有害生物を施設内に入れず、カビ等の発生を防ごうとするこの方法は、当館のような環境では、困難な側面を持つ。これは当館が周囲を緑に囲まれており、気候が温暖で、人間にとってのみならず、文化財害虫や菌類にとっても非常に住み心地の良い環境にあるからである。

とはいえ、人間を含む生物全般への影響を勘案すれば、薬剤の使用は少ないのが望ましい。作品への影響も、当然のことながら考えられる。

基本方針としてIPMの考え方を、欧米の美術館とは異なる温暖湿潤な環境の美術館にどのようにして導入していくのかを探っているのが、当館の現状である。

展示室等殺虫

昨年度まで当館では、作品が恒常的に設置される場所である展示室、収蔵庫をそれぞれ、殺虫・殺菌処理していた。が、今年度より、収蔵庫の臭化メチル・酸化エチレン製剤による殺虫・殺菌処理をとりやめることとした。これは先述のIPMに基づく環境保全の試みを、より推進するためである。

展示室、荷解室、県民ギャラリー等のピレスロイド（エンペントリン）炭酸製剤による殺虫処理は引き続き行なった。当館の場合、展示室や執務室への文化財害虫の侵入を食い止めるよう、幾つかの措置を講じてはいるが、全面的な害虫の遮断は、現状では不可能であり、ここからさらなる収蔵庫への害虫侵入の可能性を考えれば、薬剤使用はやむを得ないと判断されるためである。ピレスロイド（エンペントリン）炭酸製剤には害虫の忌避効果が若干ながら期待出来るのも、この薬剤による殺虫処理を継続している理由である。

収蔵庫等に大規模な虫菌害が発生した場合には、臭化メチル・酸化エチレン製剤に代わる薬品を用いての大規模燻蒸も、視野に入れておく必要があるかと考えている。そのための有効な薬品の調査は、今後とも継続する予定である。

環境調査

静岡は温暖湿潤であり、その文化財は虫菌害を受けやすい。この環境の中で先述のIPMを導入するためには、環境の調査が非常に重要になると考えられる。

当館では平成12（2000）年度より外部の委託業者による施設の環境調査を、年3～4回行なってきた。調査するのは

①害虫の生息状況

②空中の浮遊塵

③空中の浮遊菌

④付着菌

等の項目である。②③④の項目については、当館は極めて清浄な環境を維持しているが、①について注意を要するのは、数年来の調査によって明らかになっている。施設周囲に緑が多く、文化財害虫にとってもまた良好な環境になっていることによる。当館では調査結果に基づき、害虫の侵入経路と思われる箇所の遮断等を行なっているが、年によって大量に発生する虫の種類は異なり、処置の難しいことがあるのが現状である。

例えば今年度、梅雨から初夏にかけて、クロバネキノコバエが大量に発生し、館内への侵入も大量に発見された。体長数㎜程度のこのような虫の侵入経路は特定が難しく、繁殖が収まるのをやり過ごす以外、駆除の方法はほとんど考えられなかった。

クロバネキノコバエは飛翔力が弱く、光に向かうため、侵入後は大部分の虫が外光の射し込む窓際に集まり、9：00～10：00頃には死滅するのが大量発生中の状況であった。死骸からのカビの発生や、死骸に引き寄せられる別種の虫の侵入、来館者に与える不快感などを避けるため、降り積もった死骸はただちに清掃された。

普及活動

大規模燻蒸によらない保存環境保全のためには、施設に携わる者全員の参加が欠かせない。環境をチェックする目が多い程、より多くの情報を集積することが出来るからである。当館ボランティアや、展示室で監視業務に就くミューズスタッフへの研修は昨年度に引き続き実施されている。また博物館実習の中に「作品の保全について／IPMの試み」や「収蔵庫内実習」を組み込むことで、当館の環境保全への努力について、美術館外部に理解を求める試みも行なわれている。

災害対策

当館は、その立地条件故に、地震への対策が不可欠である。本年度は、静岡県博物館協会の主催した災害対策講習会「揺れ動く文化財～震災による文化財の被災を実見する～」の会場として当館講座室、駐車場等を提供した。この講習会は、地震への対策実例を紹介するに加え、起震車によって作品のダミーを揺らし、どのようにして文化財が被災するのかを実際に見て、防災への意識を高めようとするものであった。

作品保全環境外部評価

当館の作品保全環境を美術館外部の有識者に評価していただき、環境保全の改善を目指す試みが行なわれた。本年度は東京文化財研究所保存科学部長石崎武志氏に依頼し、平常時の環境保全対策の状況、災害時の環境保全対策の状況について、評価をお願いした。

評価していただいた結果、当館収蔵庫の空気環境に改善すべき点が見られたため、来年度以降、改善に努める予定である。

その他

観覧者へのサービスと作品保全環境とを共に向上させるにあたり、温湿度変化をより少なくする作品の装丁も模索される必要がある。作品がいわば丈夫に装丁されていれば、観覧者の目に触れる機会を増やすことが、物理的には容易になるからである。

本年度は、紙作品をある程度の気密性を保って額装する方法を、試行的に導入した。

主な保存活動の経過

6月 1日（水）～ 3日（金）　本館展示室、
本館及びロダン館荷解室、県民ギャラリー殺虫処理
7月 5日（火）　外部業者環境調査第1回目
7月25日（月）～ 7月30日（土）　博物館実習
10月11日（火）外部業者環境調査第2回目
2月 1日（水）外部業者環境調査第3回目
3月 6日（月）外部業者環境調査第4回目
3月10日（金）静岡県博物館協会災害対策講習会
「揺れ動く文化財～震災による文化財の被災を実見する～」
3月14日（火）　作品保全環境外部評価